

群 教 セ	E03 - 01
	平 22. 242 集

中 2 ドロップの防止を図る 学年集会の在り方

— 生徒のモチベーションを高める教師・生徒・保護者の

リレーションプログラムの実践を通して —

長期研修員 林 信也

《研究の概要》

本研究は、中 2 生徒の活動が失速し、無気力感が広がり、様々な問題が発現、深刻化していく状況の中 2 ドロップと定義し、その防止を図ろうとするものである。教師・生徒・保護者の三者のリレーションの中で生徒のモチベーションを高めることにより、学年や学級集団のモチベーションが向上し、防止が図れることを、学年集会におけるリレーションプログラムの実践を通して検証し、その実践のポイントについて提言を行った。

キーワード 【学年集会(学級活動) 中2ドロップ 三者のリレーション モチベーション】

I 主題設定の理由

社会の多様化、複雑化に伴い、教師、生徒、保護者の状況も大きく変わってきている。学級経営がうまくいかない、生徒や保護者と良好な関係がつかれないなどの悩みを抱える教師が少なくない。また、クラスや部活動の仲間、教師、家族とうまく関係がもてないなどの悩みや不満をもつ生徒も多い。さらに学校に関心や期待をもてないという保護者も多く見られる。

これら三者（以下三者という）の問題を解決するには、相互のリレーションを築くことが必要である。リレーションとは、「日常から互いに心を開いている状態かつ互いの立場を尊重し合っている状態」（児童心理「個と集団を育てる学級づくりスキルアップ」、2009）である。

平成22年度学校教育の指針では、「家庭・地域との連携・協力」とともに、豊かな人間性の育成を目指すために、特別活動では「よりよい生活や人間関係を形成する力の育成」を、生徒指導では「よりよい人間関係を築く力の育成」をそれぞれ挙げている。

中学校の3年間は生徒が多感な思春期を過ごす時期であり、中2になるといわゆる「なかだるみ」に陥りやすくなると言われる。この傾向は協力校においても見て取れる。進級時には生徒の多くは先輩となることへの喜びを感じスタートする。また3年生が生徒会や部活動を退いた後は学校の中軸として期待される存在ともなる。にもかかわらず個や集団が失速し、無気力感が広がっていく。その始まりが早いほど、長期化していくほど、いじめや不登校、問題行動などが引き起こされたり、深刻化したりする。

本研究は、中2生徒の活動が失速し、無気力感が広がり、様々な問題が発現、深刻化していく状況を「中2ドロップ」と定義し、その防止を図ろうとするものである。そしてその要因を中2という学年の位置付け、生徒の心の発達状況、それらが重なり合って生ずる学校生活へのモチベーション（動機付け）の低下であるととらえる。またモチベーションの低下は教師や保護者にも及んでくると考える。

中2ドロップを防止するためには、三者の関係づくりを進めていくことが急務である。そしてそこで築かれたリレーションを通して、生徒のモチベーションを高めていくことが重要であると考え。モチベーションは、他者の存在を前提として成り立つものである。他者に認められたり、温かく接してもらえる環境があればこそ、人はやる気になるものである。「互いの立場を尊重し合っている状態」となる三者のリレーションの構築を図ることは、生徒が互いに認められ、支えられる関係をはぐくむ中で、モチベーションを高める機会をつくることとなると考える。そしてそれは、集団として様々なことに取り組む際のモチベーションを高めていく。学級・学年の結束力の基盤となるとともに、生徒が、中2の時期から進路実現という課題に一層主体的に向き合っていくための下地となるととらえられる。

学年集会における三者のリレーションづくりを通して生徒のモチベーションの高まりを期すことは、研究の視点となると考える。そしてそのプログラムを中2ドロップの防止を図る手だてとすることができれば、学校や保護者のニーズに応えるものになると考え、本主題を設定した。

Ⅱ 研究のねらい

中学2年生の学年集会において、三者がかかわり合うリレーションプログラムを実践すれば、三者のリレーションが築かれる中で学校生活への生徒のモチベーションが高まり、中2ドロップの防止が図れることを実践を通して明らかにする。

Ⅲ 研究の見通し

中学2年生の学年集会において、三者がかかわり合うリレーションプログラムを次のように実践することによって、三者のリレーションが築かれる中で学校生活への生徒のモチベーションが高まり、中2ドロップの防止が図れるであろう。

- 1 学年集会を意図的なリレーションづくりの場とし、三者の実態に即したリレーションプログラムを実践すれば、三者の思いの表出、共有、理解が図られ、関係を築いていけるだろう。

【場の提供】・【リレーションの構築】

- 2 改善したリレーションプログラムを実践することによって、三者のリレーションが一層築かれ、生徒のモチベーションを高めていけるだろう。

【モチベーションの高まり】

Ⅳ 研究の内容

1 基本的な考え方

(1) 「中2ドロップ」について

中学校での成長過程では、様々な問題も生じてくるが、それは成長のために必要なことであり、教師や保護者がそれを理解し、適切に援助・指導していかなければならない。また成長は直線的になされるものではなく、葛藤を繰り返しながららせん的に進んでいくものである。その意味では各学年での発達段階に明確な境界線はない。

しかし、生徒を取り巻く環境や立場は変わってくる。平成20年度と同21年度の生徒指導上の諸問題調査結果報告書（群馬県教育委員会）によると、図1のようなデータがある。これを見ると、中2における問題行動、欠席（不登校）の総数及び増加率は、他学年と比べて高いことが分かる。また、「小・中学校における社会的規範理解の発達」（群馬大学教育学部紀要第56巻収録、2007）では、調査結果の全体的傾向の中で、「中学2年生は全領域において重大性判断が低い」と指摘している。さらに、図2のように協力校の生徒にも中2ドロップの兆候と見られる傾向が見て取れる。

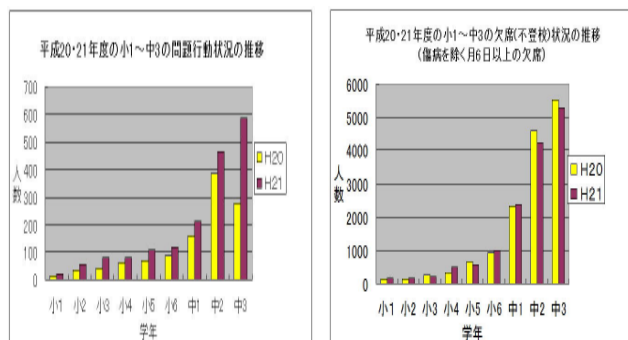


図1 平成20・21年度 生徒指導上の諸問題調査結果報告書（群馬県教育委員会）より

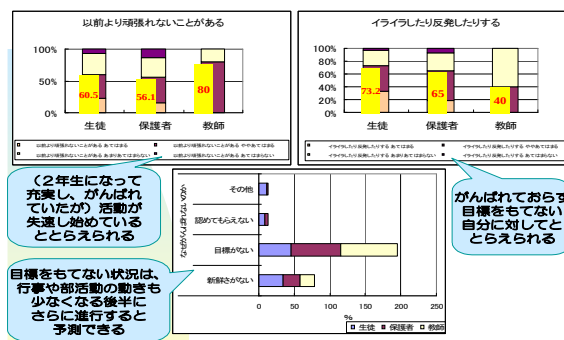


図2 協力校でのアンケート調査から

以上のような調査からも、中学校の三つの学年を比較してみると、中2は様々な問題が表出しやすい学年であると考えられる。中2ドロップに端を発し、学校が荒れるという事例も多数聞かれる。

(2) 「中2ドロップ」の要因について

中2ドロップという状況を招く要因としては、次の三つが考えられる。

一つは、中2という学年の位置付けである。生徒の多くは中1で中学校という新たな環境に慣れてくる。慣れるにつれ、緊張感もなくなってくる。さらに進路の検討にも間があり、学習にも今一つ身が入らない。特に学年後半は行事や部活動の動きも少なく、惰性に流されやすくなる。

二つ目は、生徒自身の心の発達状況によるものである。様々なことに関心が高まり、学校生活に打ち込めない、大人の言動や働きかけに反発する一方で、自分にいら立つ、他者とかかわったり、自分を表現したりすることがうまくできない。中2では一般にこのような傾向が顕著に表れてくる。

三つ目は、これら二つの要因から生ずる学校生活へのモチベーションの低下である。中2では、他者とかかわりをもつことを欲しながらも、うまく関係をもてないというジレンマが強まってくる。また切実感を伴うような明確な目標をもちにくい面がある。そのため励みとなったり、認められたりする場や機会が少なくなっていく、モチベーションを保つことが難しくなってくる。その結果、無気力感が高まってくるものと考えられる。

さらに、このモチベーションの低下は教師や保護者にも及んでくる。中3になれば持ち直すという見込みから、十分に手が打たれないまま、時を費やしてしまう場合も少なくない。そこでは教師も保護者も生徒への援助・指導に対する自信や見通しを失ったり、無力感を味わったりすることとなる。モチベーションは下がり、教師の消極的な対応や保護者の学校への関心の低下となり表れてくると考えられる。

こうしたモチベーションの低下は、進路という課題が現実味を増してくると次第に回復に向かうことも多い。しかし、それは3年生を迎えてからであることが多く、また中2ドロップの状況の根が深いほど、解消に時間がかかったり、後々まで悪影響を及ぼしたりする。その意味で、中2の早い段階でその防止を図っていくことが重要である。

(3) 教師・生徒・保護者が会する学年集会とは

本研究における学年集会とは、三者が一同に会し、プログラムに即してリレーションを築いたり、そこから生徒がモチベーションを獲得したり、高めたりする場である。こうした他者との交流体験であるリレーションプログラムを実践する場として学年集会を実施することとした。そして三者を教師・生徒・保護者ととらえた。なぜなら教師・保護者は、生徒の成長を願い、働きかけを行う援助者、指導者であり、生徒は、その適切な援助・指導により人格を形成し、社会に適応していくものだからである。三者の実態を踏まえながら、三者が肯定的にかかわり合い、違いを認め合えるようなリレーションプログラムを構成し、実践に取り組んだ。

(4) リレーションプログラムとは

リレーションプログラムとは、リレーションの構築を基盤に、生徒の学校生活へのモチベーションを高めることをねらいとして系統的に組み立てたプログラムである。作成に当たっては、次の5点に留意した。

- 三者の各々の実態分析に基づくものであること
- 三者がそれぞれの立場から肯定的にかかわり合えるものであること
- 三者に共有できるモチベーションが生じるものであること
- 思いの表出(自己開示)・共有(傾聴)により、自己理解と他者理解が促されるものであること
- リレーションの形成過程で生徒のモチベーションが高まる構成が成されているものであること

関係を築くには、三者にモチベーションが生ずる共通の課題が必要である。また、プログラムに中2生徒がモチベーションを高めることができる場面構成が成されていることが重要である。そこで、共通の課題を三者がかかわることのできる中2の教育活動に求めた。また、課題に系統性をもたせ、3回の実践を通じて関連付けることにより、実施効果が高まるように配慮した。

プログラムの構想を次項2 研究構想図に示す(内容の詳細はVの1 実践計画参照)。和やかな雰囲気をつくり、語らいを促すエクササイズやシェアリング、フィードバックなど、自己への気付きを促す構成的グループ・エンカウンターの手法を取り入れながら、段階的・継続的に行う。

(5) 中2におけるモチベーションの高まりについて

中2ドロップを防止するには、中2の環境や発達状況から生ずる学校生活へのモチベーションの低下を抑え、向上させていくことが必要である。

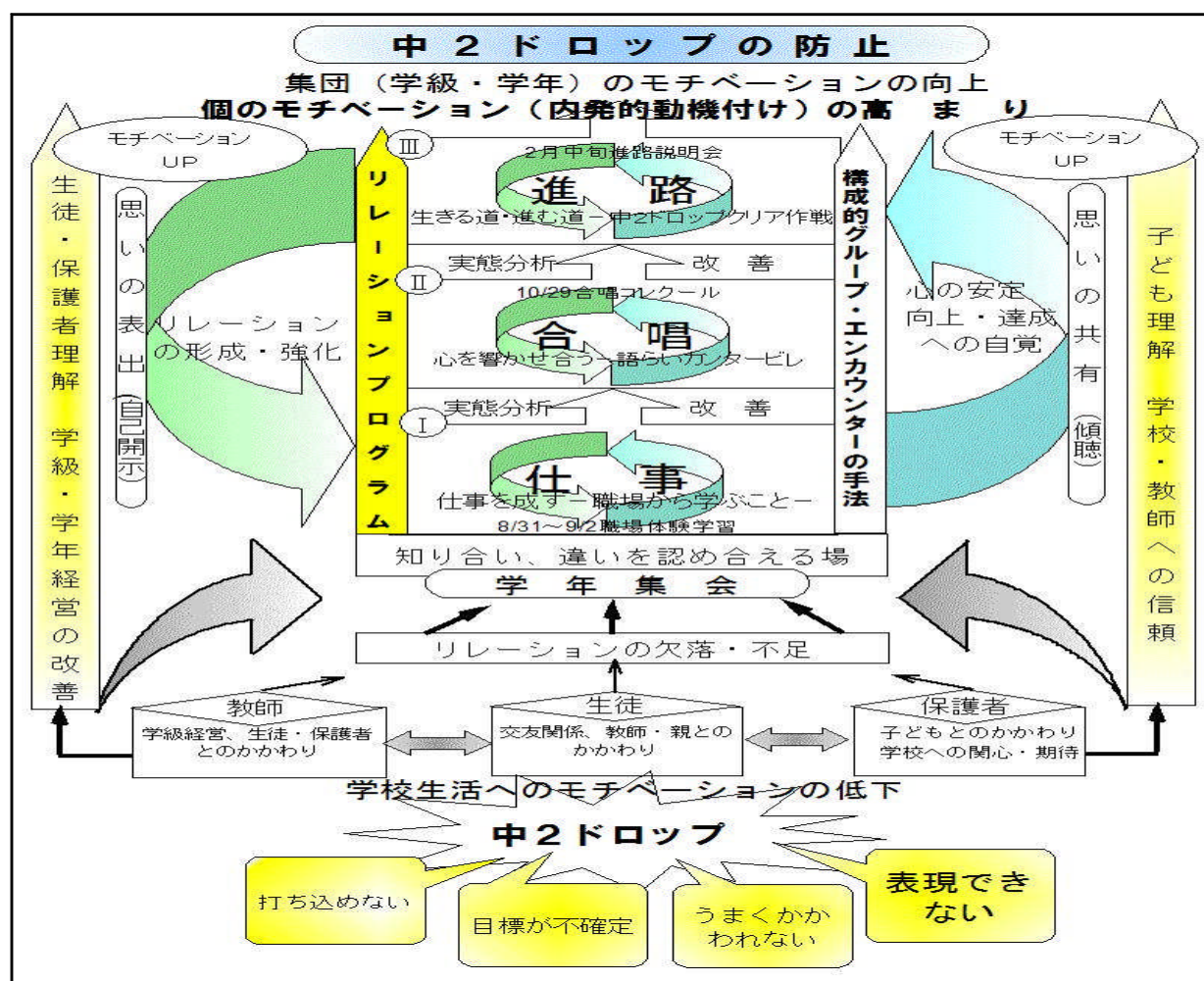
モチベーションとは、「意欲の源になる動機付け」である。つまり目標に向けて行動を喚起する心的なエネルギーととらえることができる。そしてそれは、「賞罰や利害が目標であり行動が手段となる外発的動機付けと行動が目標に直結する内発的動機付け（達成動機）」（教育心理「教育・心理学の基礎知識」、1989）とに分かれる。本研究の求めるモチベーションは、学校生活に対する内発的動機付けである。得するから、叱られるからするのではない、「したいからする」のである。これは、「自分（たち）の力でやってみよう」、「（失敗しても）まだがんばろう」という挑戦する気持ちへとつながる自発的な意識である。

この内発的動機付けの基盤となるのがリレーションである。自分が周りの人と温かい心の絆で結ばれ、支援されているという意識の高まりが、生徒の内発的動機付けを向上させていくと考える。悩みを分かち合える仲間やバックアップしてくれる存在が力となるのである。三者のリレーションを築く中で、心の安定を得て、自己や所属する集団と向き合い、その向上や目標の達成に対する自覚を強めている状態が、モチベーションを高めている生徒の姿であると考えられる。

この個のモチベーションの高まりは、学年や学級集団のモチベーションの向上へと波及していく。個のモチベーションの結集が、学年や学級の雰囲気や質を高めていく。そのような状態で生徒が進路実現という課題に向き合うことができれば、それこそが中2ドロップが防止された状態であると考えられる。

2 研究構想図

本研究の構想図を次に示す。



V 研究の計画と方法

1 実践計画

計3回の学年集会を職場体験学習、合唱コンクール、三者面談の各教育活動の実施時期に合わせて実施する。

○対 象：中学校第二学年120名及び保護者・教職員 ○取扱い：学級活動（全5時間予定）			
7～8月 ○質問紙事前調査実施（対象：中2生徒・教師・保護者）・分析 ○リレーションプログラムⅠの作成、保護者向けリーフレット作成・配布			
月 日	主 題	ね ら い・視 点	活 動 内 容
9/14	学年集会（学級活動） リレーションプログラムⅠ 「仕事を成す ー職場から学ぶことー」	三者の思いの表出・共有を通して リレーションを築く。 ○三者のかかわりの実態から関係 づくりに主眼を置いたプログラ ムを実施する。	・既習の職場体験を踏まえたテーマを提示する。 ・アイスブレイクのエクササイズを通して、和 やかな雰囲気づくりに努める。 ・二者または三者の各グループで、テーマに向 けた自己開示と傾聴を促すエクササイズを行 う。 ・グループ活動から得た仕事を成す上で大切に したい思いを各自がワークシートに書く。 ・ワークシートの内容についてグループ内や全 体の場で発表し合う（受容的評価・助言）。 ・まとめの話と次回の予告を行う。 ・シェアリングを行う。
9～10月 ○実践に対する分析・検証1 ○リレーションプログラムⅡ（改善プログラム）の作成、保護者向けリーフレット作成・配布			
10/19	学年集会（学級活動） リレーションプログラムⅡ 「心を響かせ合う ー語らいカンタービレー」	三者の思いの表出・共有を通して、 リレーションを深めるとともに、 合唱コンクールに対するモチベー ションの向上を図る。 ○生徒の実態分析から、合唱をつ くりあげるといふ集団としての 取組に対し各自が目標をもてる ようなプログラムを実施する。	・前回のプログラムを振り返るとともに、10日 後に控えた合唱コンクールに触れ、テーマを 提示する。 ・アイスブレイクのエクササイズを通して、和 やかな雰囲気づくりに努める。 ・二者または三者の各グループで、テーマに向 けた自己開示と傾聴を促すエクササイズを行 う。 ・グループ活動から得た合唱を成す上で大切に したい思いを各自がワークシートに書く。 ・ワークシートの内容についてグループ内や全 体の場で発表し合う（受容的評価・助言）。 ・学年合唱を行い、保護者や教師からの感想（受 容的評価・助言）を取り上げる。 ・まとめの話と次回の予告を行う。 ・シェアリングを行う。
10月～11月 ○実践に対する分析・検証2 ○リレーションプログラムⅢ（改善プログラム）の作成、保護者向けリーフレット作成・配布			
11/16	学年集会（学級活動） リレーションプログラムⅢ 「生きる道・進む道 ー中2ドロップクリア作戦ー」	三者の思いの表出・共有を通して、 リレーションを深めるとともに、 進路実現に対するモチベーション の向上を図る。 ○生徒の実態分析から、各自が進 路に対する目標や見通しをもて るようなプログラムを実施す る。	・前回のプログラムを振り返るとともに、三者 面談の話題に触れ、テーマを提示する。 ・アイスブレイクのエクササイズを通して、和 やかな雰囲気づくりに努める。 ・テーマにかかわる三者のロールプレイを見る。 ・二者または三者の各グループで、ロールプ レイをもとにテーマに向けた自己開示と傾聴を 促すエクササイズを行う。 ・グループ活動から得た進路に対する思い（今 改善すべきこと）を各自がワークシートに書 く。 ・ワークシートの内容についてグループ内や全 体の場で発表し合う（受容的評価・助言）。 ・まとめの話をし合う。 ・シェアリングを行う。
11月～12月 ○実践に対する分析・検証3 ○質問紙事後調査実施（対象：中2生徒・教師・保護者）・分析			

2 検証計画

見通し1、2に対して、下記の観点及び方法で検証する。

	研究の見通し	観 点	方 法
1	学年集会を意図的なリレーションづく りの場とし、三者の実態に即したリレ ーションプログラムを実践すれば、三者 の思いの表出、共有、理解が図られ、関係 を築いていけるだろう。	三者の実態をもとに作成したリレーシ ョンプログラムは、三者の思いの表出・共有 ・理解を促し、関係を築いていく上で有効 であったか。	・ワークシート記述の読み取り ・シェアリングの記述の読み取 り ・保護者向けのアンケート調査 ・教職員への聞き取り調査
2	改善したリレーションプログラムを実 践することによって、三者のリレーシ ョンが一層築かれ、生徒のモチベーシ ョンを高めていけるだろう。	三者の実態をもとに作成した改善プログ ラムにより、リレーションは深まったか。 またその結果、生徒のモチベーションが高 まったか。	・ワークシート記述の読み取り ・シェアリングの記述の読み取 り ・三者への事後アンケート調査 ・参加人数の推移（保護者）

Ⅵ 研究の結果と考察

1 実践1(リレーションプログラムⅠ「仕事を成すー職場から学ぶことー」・図3参照)

(1) テーマの設定について

「仕事」を視点に共通テーマを設定した。直前に行われた職場体験学習とリンクできる時機を得たテーマと考えた。教師・生徒から見れば、まとめに取り組んでいる最中であり、保護者にとっては、体験から何をきてきたのか気になるところでもある。つまり共有できるモチベーションが生ずる期待ができ、自己開示と傾聴により、リレーションを築いていけると考えた。

(2) 活動の状況

グループから全体へ語らいと共有の場を広げていった。グループは、実態から事前に二者または三者を交えた意図的な構成に配慮した。

○ 参加数と内訳

156名(教師6名、生徒109名、保護者41名)

○ 参加者の反応

初めての試みということで、三者とも緊張が見られた。アイスブレイクでは、ペアになってのエクササイズを行ったが、生徒同士で組んでしまう。保護者もあえてそこに交わろうとしない。教師もまだぎこちない。ここまでは、三者の間に相容れない隔たりが生じているようだった。

しかし、二者または三者が交じるグループ編制を促すと、状況は様変わりしていった。条件を満たす組を先んじて作るために、親も子も教師も積極的にグループを構成していった。あちこちから歓声があがり、こわばった顔に様々な表情が表れ出した。三者の距離は近付いていった。

その後のグループ活動は、和やかな雰囲気包まれて進んだ。アドジャン形式で決まった語らいの視点について順番に語らう。もじもじしながらも思いを口に始める生徒たち。大人も出だしは同じようだ。しかし、互いがそれを温かく見守り、笑みを浮かべながら聴き入る様子が多く見られた。図4は、三者のシェアリングの記述である。

学年集会(学級活動)リレーションプログラムⅠ「仕事を成すー職場から学ぶことー」 展開案	
○ 日時: 9月14日(火) 第6校時 ○ ねらい: 三者の思いの表出・共有を通して、リレーションを築く。 ○ 準備: ワークシート、シェアリングシート、アンケートシート、隊形図、下駄きき等、筆記用具、BGM用素材、プロジェクタ、パソコン、スクリーン、班表示テープ、マイク	
主な学習活動	指導上の留意点
(学年主任によるあいさつ)	
1 既習の職場体験の話題から、テーマについて知る。	3分 ○ 10日ほど前に付いた職場体験学習のまとめの活動中であることを踏まえ、テーマへの意図が伝わるようにする。
2 アイスブレイクのエクササイズを体験しながら、グループを作る。 ○ ワールドカップリング(2人へ) (前書き自由記入を許可する)	7分 ○ 緊張がほぐれ、和やかな雰囲気になるショートエクササイズを実施する。 ○ ペアリングが円滑できる配慮をするともに、三者を交えたグループで取り組めるよう促す。
3 三者または二者を交えたグループで仕事や職場で体験したことやそれについてどんな考えを持っているかなどを語らう。 (語らいの視点) ・ なりたい(かった)仕事 ・ 仕事をやってよかったこと ・ 感得る上で大切なこと ・ 何のために働くのか ・ 仕事や職場で得られるもの など (語らうにはバリエーションもよい) ・ 生徒は職場体験学習をもとにする	15分 ○ 実施や交流時間の確保を考慮し、事前にグループ編制を行っておく。 ○ 保護者には受付時にグループ番号札を配布しておく。 ○ スムースにグループ隊形になれるよう、指示物やプリント等に隊形図を示しておく。 ○ アドジャンテーション形式で、配布シートにかかれた隊形について語らうよう働きかける。 ○ 話し手には無理のない範囲で自己開示を促す。聞き手には途中で遠回り、批判したりせず、そのまま受け入れる傾聴を促す。 ○ 動き終わったら拍手で労うよう働きかける。 ○ 各グループを巡り、活動の様子を見取り、必要に応じて支援する。
4 グループでの話し合いをもとに、各自が仕事を成す上で大切にしたい思いをワークシートに書く。	7分 ○ あまり深く考え込まず、印象に残った言葉や体験などから思いをつまみに書くよう促す。
5 グループ内や全体の場でワークシートの内容について発表し合う。 (グループ活動2)	10分 ○ 話し手には無理のない範囲で自己開示を促す。聞き手には途中で遠回り、批判したりせず、そのまま受け入れる傾聴を促す。 ○ 動き終わったら拍手で労うよう働きかける。 ○ 発表が終わったところは、それぞれの思いについてお互いに評価し合ったり、助言し合ったりするよう働きかける。 ○ 見取りによる意図的指名を交え、発表を促していく。
6 まとめを語る。	3分 ○ 三者からの発表が共有できるようにする。 ○ 学年主任から、職場体験学習の活動を踏まえた話を述べていく。
7 活動をふり振り返り、気づいたこと、感じたことをワークシートに書く。	5分 ○ シェアリングは、生徒は各教室で、保護者はその場でアンケートと併せて行う。 ○ プログラムⅡの内容について工夫して伝え、期待や参加意欲が高まるようにする。また保護者には、プログラムⅠ～Ⅲを通して活動内容やねらいについて説明し、理解を深めてもらえるようにする。

図3 リレーションプログラムⅠ展開案

生徒の声(抜粋): 保護者の方や先生も交じって語り合えてよかった。保護者の方たちは、私たちの将来についてよく考えていることが分かった。人とかかわりは本当に大切なんだと思った。

保護者の声(抜粋): 子どもたちが素直に自分の考えていることを発表してくれてうれしかった。自分もいろいろと悩んでいた中学時代を思い出すことができた。

教師の声(抜粋): 実際に働いている人の話は深いし、説得力がある。さらにつとこんだ語らいができるとテーマへの一層の気付きを促すことができると思う。

図4 リレーションプログラムⅠシェアリングの記述

2 実践2(リレーションプログラムⅡ「心を響かせ合うー語らいカンタービレー」・図5参照)

(1) テーマの設定について

前回の実践を踏まえ、「合唱」に視点を当てた共通テーマを設定した。合唱コンクールを間近に控えた三者にとって、モチベーションを喚起できる時機を得たテーマであり、チームプレイという面から前回の視点「仕事」ともつながると考えたからである。前回築かれたリレーションを基盤に、テーマに対する思いを深めたり、広げたりする中で、生徒は、合唱に対する自己の在り方をとらえ直し、集団の向上に貢献できる存在価値に気づき、モチベーションを高めていけると考えた。

(2) 活動の状況

前回同様、グループでの語らいを起点とした。語らいの機会を十分に保障することが前回の課題

となっていたため、今回も事前に二者または三者を交えたグループを構成した。またリレーシヨンの広がりをおねらい、一部構成者を入れ替えた。

○ 参加数と内訳

145名（教師6名、生徒111名、保護者28名）

○ 参加者の反応

前回に比べ、導入から円滑で活気あるアイスブレイクのエクササイズを展開できた。三者ともよく反応し、よく活動した。語らいの場をつくるのも早かった。時間の確保も十分できそうだった。

グループ活動に入っても、互いの思いや考えによく耳を傾けていた。しかし、「やや語らいの視点が難しい」という声も聞かれた。そのためか、活動が停滞しているグループも一部に見られた。語らいをもとに個々でワークシートに思いを記入する場面においても、困惑している生徒が若干見られた。それでも一生懸命筆を走らす参加者が多く、合唱に対するとらえ方を見つめ直している記述も多数見られた。後半に生徒が披露した学年合唱は、練習を始めてから最もよい出来栄であったとの評価を教師から聞くことができた。生徒からは、「楽しく歌えた」、「堂々とできた」、「もっと頑張りたい」などの前向きな発言を耳にできた。また、保護者からも賞賛や励ましの感想が寄せられた。図6は、三者のシェアリングの記述である。

学年集会(学級活動)リレーシヨンプログラムⅡ「心を響かせ合うー語らいカンタービレ」展開案	
○日時：10月10日(火) 第3・4校時(85分)	
○ねらい：三者の思いの表出・共有を通して、リレーシヨンを深めるとともに、合唱コンクールに対するモチベーションの向上を図る。	
○準備：ワークシート、シェアリングシート、アンケートシート、陰形図、下書き等、筆記用具、BGM(明喜村、プロジェクタ、パソコン、スクリーン、班表示テープ、長机、マイク)	
主な学習活動	時間
(学年主任によるあいさつ)	5分
1 前回のプログラムを振り返るとともに、今回のテーマについて知る。	5分
2 デザインブレイトのエクササイズを体験しながら、グループを作る。 ○ジェスチャーで集え！(血液型・生まれ月) ※説明～2分間×2回で実施～ ○シェアリングの実施	10分
3 三著または二著を交えたグループになり、合唱について体験したことやそれについてどんな考えをもっているかなどを語らう。 (語らいの視点) ・大好きな歌・曲 ・小中学校での合唱の思い出 ・合唱に参加してよかったこと ・合唱に参加してつらかったこと ・何のために歌うのか ・合唱を通して得られるもの など (曲によってバリエーションをもたせる)	15分
4 グループで話し合いをもち、各自が合唱を成す上で大切にしたい思いをワークシートに書く。 ～♪ BGM ♪～	10分
5 グループ内でワークシートの内容について発表し合う。 (グループ活動2)	10分
6 グループ内で発表されたことを全体の場で共有し合う。	10分
7 学年合唱を練習し、三著から感想を発表し合う。 生徒→スティーブ前編→合唱→その場でインタビュー・広場メッセージ 8 まとめめの発表をする。	10分
9 活動振り返り、気づいたこと、感じたことをワークシートに書く。 ～♪ BGM ♪～	10分

図5 リレーシヨンプログラムⅡ展開案



思いの共有を経た学年合唱の様子

生徒の声(抜粋)：合唱することにより、クラスや学年がまとまったり、達成感を味わえたりとよいことがたくさんあると改めて感じた。私ももっと声を出して、ハーモニーを響かせたい。

保護者の声(抜粋)：合唱は、達成感が感じられ、気持ちがよいと聞いて、全体的に変わってきたなと実感した。合唱コンクール当日が楽しみだ。

教師の声(抜粋)：生徒が、予想以上に合唱の達成感などを味わう経験があったので、安心した。合唱(コンクール)に少し期待がもてた。

図6 リレーシヨンプログラムⅡシェアリングの記述

3 実践3(リレーシヨンプログラムⅢ「生きる道・進む道一中2ドロップクリア作戦」・図7参照)

(1) テーマの設定について

二度の実践を踏まえ、「進路」に視点を当てた共通テーマを設定した。三者は、本実践の直前に進路相談も含めた面談を経験している。三者ともテーマについて意識が高まっているところであり、進路実現に向けたモチベーションを喚起できる好機ととらえた。また、「仕事」、「合唱」というチームプレイについての思いの共有を経た語らいの中で、生徒は、進路実現に対しても、学級や学年で結束して挑んでいこうというモチベーションを高めていけるものと考えた。

(2) 活動の状況

今回は、三者面談のロールプレイからテーマへのアプローチを図った。三者にありがちな具体的な場面をもとに語らうことにより、テーマにかかわる気づきを促そうと考えたからである。前回同様、グループは一部再構成した意図的な構成とした。

○ 参加数と内訳

143名（教師6名、生徒107名、保護者30名）

○ 参加者の反応

アイスブレイクのグループ対抗エクササイズは、盛り上がりを見せ



ロールプレイの様子

た。「楽しい」との声が聞かれ、打ち解けた雰囲気になった。また、学級担任が教師・生徒・母親役を務めた三者面談のロールプレイには視線が集中した。目標が定まらず無気力で反発を繰り返す生徒、我が子に耳を貸さず一方的にやる気のなさを指摘する母親、仲裁に入りつつも母親に同調し努力点の指摘に偏りがちな教師という設定である。ともすれば重苦しい展開になりそうなところを、和やかな雰囲気を損なうことなく演じられた。生徒役の演技に幾度も笑いが起きた。

グループによる語らいも、和やかに進んだ。語らいの視点を三つに絞ったことで余裕をもって語らう様子が見られた。また、語らいが済んでも、充実した表情で言葉を交わすグループも見られた。一方、「何を語らってよいのか分からない」という声も聞かれたので、モデリングを示した。語らいをもとに「3年0学期（2年3学期を指す）」に向けて改善すべきことを考え、グループ内で発表し合う。最も支持を受けた意見については、全体で共有した。いずれも気づきから進路に対する関心ややる気を高めていることの分かる内容であった。また、受け止める側からは、発表の度に拍手がわき起こった。図8は、三者のシェアリングの記述である。

学年集会(学級活動)リレーションプログラムⅢ「生きる道・進む道」中2ドロックリア作戦」展開案
 ○日時：11月18日(火) 第5・6校時
 ○ねらい：三者の思いの表出・共有を通して、リレーションを深めるとともに、進路実現に対するモチベーションの向上を図る
 ○準備：A3白紙・マジック(グループ数分) ワークシート、シェアリングシート、アンケートシート、隊形図、下敷き等、筆記用具、BGM用機材、ロールプレイ準備(机・イス・役割名札)、プロジェクタ、パソコン、スクリーン、班表示グループ、表札、マイク

主な学習活動	時間	指導上の留意点
(学年主任によるあいさつ) 1 前回のプログラムを振り返るとともに、今回のテーマについて知る。	10分	○1 進路ほど前に付かれた三者面談について触れ、話し合われた内容について想起を促すなどしてテーマの意識が高まるようにする。 ○テーマへの意識を高めるために、学級委員や担任から三者面談後の感想やクラスの様子などを話してもらうようにする。
2 デイズブレイクのエグザサイズを体験する。 ○6人組になってピクサシカンカン ※説明2分間～3分間実施～シェアリングの実施	10分	○班長がほぐれ、和やかな雰囲気になるショートエクササイズを実施する。 ○ペアリングを回避するよう促すとともに、必ず二～三者を交えたグループになるようにする。 ○シェアリングを実施する。
3 3名または2名を交えたグループになり、ロールプレイを視聴し、感想を出し合う。 [グループ活動1]	25分	○班長や交流時間の確保を考慮し、前回は異なる構成で事前にグループ編制を行っておく。 ○スムーズにグループ隊形になれるよう、掲示物やプリント等に隊形図を示しておく。 ○三者のしめとめとありがちな状況を演ずることにより、テーマに対する問題意識が生ずるようになる。 ○シナリオに沿って、教師が役割を演ずる。 ○一層関心や興味をもって受け止められるように、実施に合い、余裕をもちようにする。 ○視聴直後に数名に感想を尋ねる場を設ける。 ○話し手には無理のない範囲で自己開示を促す。聞き手には途中で通ったり、批判したりせず、そのまます受け入れる積極性を促す。 ○書き終わったら拍手で労うよう働きかける。 ○各グループを巡り、活動の様子を見取り、必要に応じて支援する。
4 デイズブレイクやグループでの語らいをもとに、各自が3年0学期に向けて今改善すべきことについてワークシートを書く。 ～♪ BGM ♪～	10分	○あまり深く考え込まず、印象に残った場面や言葉、体験などから思いつくまま書くよう促す ○三者の立場から考えられるようにする ○生徒には、①自分自身に対して、②学級や学年に対してという2点から具体的な改善点を記すよう働きかけていく。 ○理由や思いも書けるように、各自の記述を見取りながら支援する。
5 グループ内で「サングジニア」の内容について発表し合う。 [グループ活動2]	20分	○話し手には無理のない範囲で自己開示を促す。聞き手には途中で通ったり、批判したりせず、そのまます受け入れる積極性を促す。 ○書き終わったら拍手で労うよう働きかける。 ○発表が終わったグループは、一層よかった意見を話し合い、決めているように働きかける。 ○見取りによる意図的指名を受け、全グループに発表を促していく。 ○本人からの発表を働きかけていく。 ○より多くの発表が共有できるようにする。
6 グループ内で発表されたことを全体的な場で共有し合う。	15分	○学年主任から「3年0学期」や上進学校調べ、進路説明会等を踏まえた話を聞いたこと、保護者はその場でアンケートも併せて行う。 ○シェアリング後、リレーションプログラムにかかわるフィードバックを行い、閉会する。
7 活動振り返り「気づいたこと」感じ、たことをワークシートに書く。 ～♪ BGM ♪～	5分	

図7 リレーションプログラムⅢ展開案

生徒の声(抜粋)：学年・学級の雰囲気が進路モードになるように、進んで学習の環境を整えていきたい。学級委員としても、自分が変わっていかなければ学級も変わらなと感じた。

保護者の声(抜粋)：ロールプレイの母親にもう少し理解する態度がほしいと思ったが、自分も思い当たり、反省した。認めること、理解しようと努める姿勢の大切さを感じた。

教師の声(抜粋)：生徒役をするとう一方的にできない自分を指摘され、苦しい立場にあることが実感できた。三者とも願いは一つ。将来に向け一層のチームワークを築いていく必要がある。

図8 リレーションプログラムⅢシェアリングの記述

Ⅶ 研究のまとめ

1 実践(リレーションプログラムⅠ～Ⅲ)を通じた考察

(1) 見通し1について

図9・10で見られるように、第1回学年集会・リレーションプログラムⅠは、全体的に見て概ね成果があったととらえられる。参加者が共に最もよいと感じたことは、「他の思い・考えを共有できたこと」である。他者とのかわりに意義を感じ、前向きにとらえることは、リレーションを築く前提となる。次いで「心を開けた」「つながりができた」などの数値も高く、リレーションが築かれつつあると考えられる。三者には、一様に活動に対する戸惑いや抵抗感が見られた。導入時には、「始めはぎこちなく、どうなることかと思った」という保護者の言葉通り、三者は距離を置き、交わりに対して消極的に見えた。しかし、かわりを避けているわけではなく、むしろ欲していることが、活動を通して分かった。リレーションプログラムの成せることは、三者の間にある溝を埋め、お互いが一歩踏み出す場面を設定していくことである。エクササイズの意図的構成によって溝は埋められ、「内容

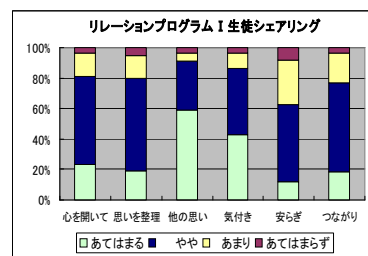


図9 リレーションプログラムⅠ生徒シェアリング回答

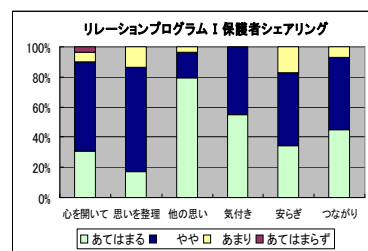


図10 リレーションプログラムⅠ保護者シェアリング回答

的によかった」、「もっと子どもと話せるとよかった」、「もっと他の人の意見も聞きたかった」などの、さらにかかわりを欲する、あるいは次回以降に期待を寄せる声が三者から多く寄せられた。同時に、次のプログラムの、三者の一層の思いの表出・共有を図る工夫・改善が課せられた。

(2) 見通し2について

プログラムⅠで三者の間に生じていた隔たりは、プログラムⅡの導入時にはほとんど見られなかった。それは、生徒たちが活動に慣れてきたことや互いに知り合えたからであると考えられる。例え一度でも時間と場を共有し、語らったことが、硬さやぎこちなさを取り払ったととらえられる。三者のリレーションは深まりつつあると考えられる。

また、「やる気・期待」の肯定的回答（あてはまる・ややあてはまる）は生徒、保護者とも80%を超えた。合唱の出来栄えやその反応と併せてみると、モチベーションが高まったととらえられる。

シェアリングとアンケート結果全体から見ると、肯定的回答の平均増減率は、前回から3%下回った。共通して最も減少したのは、「気付き」である。記述に「語らいの視点がやや難しかった」という声が見られた。視点がとらえにくかったために、十分な交流が図られず、気付きを生み出したり、つながりを築いたりすることが難しかったのではないかと考える。個から集団へのモチベーションの一層の向上に向けて、テーマと視点についても吟味を重ねていく必要があると考えられる。

プログラムⅡと比べ、プログラムⅢに対する肯定的回答の平均増減率は1.2%増加した。微増ではあるが、プログラムが肯定的評価を維持していることが分かった。中でも、「心を開いて(3.9%)」、「安らぎ(2.3%)」を感じる生徒と、「楽しく参加・また参加(共に3.6%)」という保護者の増加から、和やかな雰囲気をつくることができ、リラックスして素直に自分を出せる参加者が多くなったと考えられる。そして、その中で一層のリレーションが築かれてきたととらえることができる。

また、両者の「気付き（生徒3.9%・保護者6.6%）」と生徒の「思いの整理(8.4%)」も増加した。このことから、三者面談のロールプレイという具体的場面の視聴と振り返り、気付きを促す語らい、改善すべきことを各自の立場で考えるというプログラムの流れが適切であったと考えられる。

さらに、合唱コンクールでの成果や「やる気・期待」の肯定的回答率の増加から、プログラムにより個とそれに伴う集団としてのモチベーションは高まってきたと考えられる。この個から集団へと波及したモチベーションを今後どのように向上させていくかが、「3年0学期」に向けた学年・学級経営における重要な視点となっていくものと考え（図11～13参照）。

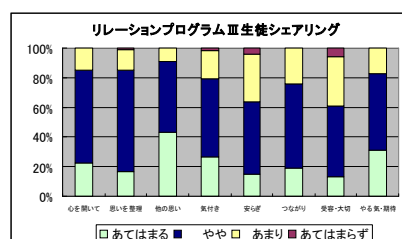


図11 リレーションプログラムⅢ生徒シェアリング回答

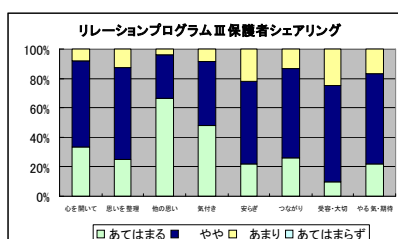


図12 リレーションプログラムⅢ保護者シェアリング回答

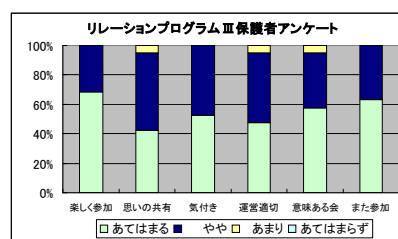


図13 リレーションプログラムⅢ保護者アンケート回答

2 成果と課題

考察から得られた成果と課題について次に示す。

(1) 成果

- 三者のリレーションプログラムを提供することにより、学年集会を三者が思いを共有しながらリレーションを築いていく機会とすることができた。
- 合唱発表やロールプレイなど、プログラムに意図的構成を組み入れたことにより、三者の多くが具体的場面から自己を見つめ直し、気付きをもつことができた。また、そこから生徒はモチベーションを高めたり、それを集団の質的な向上に結び付けたりしていくことができた。
- 学年集会の開催時期や日時等に十分に調整が行き届かなかったにもかかわらず、3回目には保護者の参加者が増加した。また、プログラムⅠ～Ⅲを通した生徒・保護者のシェアリングとアンケートの肯定的回答率の平均値は80%を超え（生徒77.4%・保護者92.4%）、プログラムは、全

体として肯定的な評価を維持し、支持を得ることができた。

(2) 課題

- リレーションプログラムに対する支持的な意見が多い一方で、回を重ねるごとにその内容や構成などに求められるレベルも上がってきた。三者の実態に照らして要望や意見を分析・整理し、プログラムの構成に一層反映させていく必要がある。
- テーマによっては語らいの視点がややとらえにくかった。これによりプログラムの成否が左右されると言ってもよい。三者の実態に即したテーマと視点の設定に一層配慮していく必要がある。
- プログラムの構成や内容だけでなく、周知方法、実施時期、会場設営、グループ編制などに配慮し、三者、特に保護者が参加しやすいような環境を一層整えていく必要がある。

3 実践から見てきたこと

三者のリレーションは、中2ドロップを防止するための基盤となる。中2生徒が独りでモチベーションを保ち、自己実現に努めていくことは容易ではない。そこには認め合ったり、支え合ったりする仲間やそれを見守り、後押しをしてくれる存在とのつながりが必要となってくる。中2ドロップの防止は、中2生徒が、そうした存在を意識するところから始まると考える。

本研究のリレーションプログラムは、三者で課題を乗り越えようとする個や集団のモチベーションを高める上で有効なプログラムであると考えられる。図14に実践に際するポイントを示す。

1 事前の実態把握に当たって

- 三者のニーズを把握し、プログラムのテーマや内容に反映させることにより、関心や期待を高めるようにする。

2 プログラムの構成に当たって

- 学級活動や学校行事の年間計画に照らして、三者のモチベーションを喚起する時機を得たテーマ設定を行う。また、テーマ間にねらいに即した系統性や関連性をもたせることにより、実施効果を高める。
- 語らいの視点は、ねらいに迫れるものとなるよう吟味・精選する。その際、三者にとりとりえやすく、具体的に考えられる内容となるようにする。
- ロールプレイやエクササイズなどを用いて、テーマや語らいについて一層とりえやすくするための具体的な場面を設定する。
- リレーションを築くための和やかな雰囲気づくりに有効なエクササイズを取り入れるようにする。その際、参加者が負担を感じることをないように簡略化したり、準備を軽減したりする。
- 語らいや思いの共有の場を十分確保したり、フィードバックやシェアリングが余裕をもってなされたりするように内容を精選する。

3 プログラムの運営に当たって

- 三者にリレーションプログラムの趣旨とテーマについて事前に余裕をもって周知を図る。生徒には必要な事前指導を行うようにする。また保護者には、詳細を記した案内を出すようにする。
- プログラムのねらいや内容、当日の運営体制等について、学年会や職員会議などで検討・協議の機会をもち、教職員間の十分な共通理解のもとに実施に移せるようにする。

図14 リレーションプログラム実践のポイント

<参考文献>

- ・児童心理「個と集団を育てる学級づくりスキルアップ」 金子書房(2009)
- ・児童心理「教育・心理学の基礎知識」 金子書房(1989)
- ・今村 光章 著 『アイスブレイク入門・こころをほぐす出会いのレッスン』 解放出版社(2009)
- ・國分 康孝 著 『エンカウンター・心とこころのふれあい』 誠信書房(1981)
- ・台 利夫 著 『ロールプレイング』 日本文化科学社(1986)

